



最強の神様

桜崎
緒斗子

日曜の昼過ぎ、仁と彰は「来来軒」にいた。天井から吊り下げられたような格好で鎮座するテレビでは仕様のないワイドショーがかかっている。「来来軒」は彰の住む市営住宅の最寄り駅に程近い昔ながらの中華飯店である。16歳の仁は、あまり出来の良くない（市内では後ろから数えた方が早い学力レベルの）市立高校に通う男子生徒だ。彰は40歳で仁の父親だった男だ。「だった」というのは、彰は仁の母親である里奈と離婚したから。離婚したのは仁が中学1年（13歳）、彰が37歳の時だった。

「コーラでいいか」彰が言った。

「うん」

二人が「来来軒」のチャーハンと平らげた後、彰は瓶ビールとコーラを注文した。彰はテ―

ブルに運ばれてきたビールをコップに注ぐと1杯目のビールを飲み干した。

「チャーハン。ちよつと味変わったよね。塩のかたまりが入ってた」とコップにコーラを注ぎながら仁が言った。

「最近大将を見ないけど、結構歳とつてたから体調でも崩したのかな。今厨房に立ってるのは息子さんのほうだろうけど、やつぱり完全に同じ味というわけにはいかないのかもな」と彰が小声で答える。どこから見ても父親と息子にしか見えない二人が「来來軒」にいたのはこの日が初めてではない。この二人は時々こんな日曜の昼どきを過ごすのである。というのも、互いにそれが嫌な感じがしないから。

「最近、母さんには会ってるのか」

「ほとんど会ってない。俺がいない間に寄ったりしてみたいんだけど、ばあちゃんに金を用立てしてみたいな感じじゃないかな」

「……………」

「じいちゃんが死んじゃってから、ばあちゃんと俺には家が広すぎて困っちゃうよ。掃除とかも大変だし。庭の木とかびっくりするくらい伸びるんだよ。隣の家の塀を超えちゃっ

たりしてさ」

仁は里奈の母親である佳子よしこの元に身を寄せている。親権を放棄した里奈に代わって親権を持つべく仁を養子に入れた里奈の父親、辰雄たつおが1年前に他界してから、仁の養親となつたのが佳子というわけだ。辰雄には幾らかの遺産があったようで、金銭的に困っている様子は無い。それにしても里奈が猫のような女なのは相変わらずなのだと思つた。行きたいところに行き、帰りたい時に帰ってくるだけの存在なのだろう。それに比べて彰はドールマンのように従順な男である。

彰と里奈が出会つたのは、彰が高校時代に共通の友人が企画した合コンだった。はじめのうちは付き合うこともなく、時折り共に夜を明かす様なあまり感心できる関係ではなかったが、そのうちに何となく格好がつかないからという仕様のない理由で「付き合うか」ということになった。もつとも身体の相性は良かったのである。互いに、別れたり寄りを戻したりというようなことを繰り返しているうちに、5年ほどが経つた。そんな時、子供ができたということで、いわゆるできちゃった結婚をしたというわけだ。当時は彰が24歳、

里奈が21歳、平均的な結婚年齢より幾らか早く結婚した、いささか稚拙なカップルというところであった(少なくとも周りからはそう見られていた)。

もちろん、若ければ身体の相性だけで押し切れたものも、結婚してからは精神的な相性の悪さが浮き彫りになった。子供を妊娠した女性として、里奈は彰を寄せ付けなくなった。夜の生活からも遠のき、彰は最初こそそれにストレスを抱えることもあったが、次第にそれに慣れてしまった。精神的な相性が決して良いとは言えない二人は、ちょっとしたことでも互いにキツイ言葉を浴びせ合うこともあった。とはいえ何とか曲がりなりにもありふれた(ように周りからは見える)家庭を築いていったのである。

ことの発端は仁が小学校4年の時のことだ。時々、友人との付き合いで酒に酔って帰ってくる里奈だったが、ある時、結婚前に付き合い合ったことのあるといていた男にばったり道で合ったというのだ。子供の写真を見せてという男に仁の写真を見せたところ「俺に似てないか」と冗談を言われたというのだ。酔っていなければもちろんそんな話を彰にすることもないだろうが、あいにくその日はちょっとした言い合いになり、里奈はつい口を滑らせたといった具合だ。その時は、その男が誰なのか詳しく聞くこともしなかったが、

その頃から少しずつ彰の中に違和感が芽生えはじめていた。

結婚前からお世辞にも理性的な付き合いとはいえなかった二人に、離婚の話が出てきたのはいわば必然だったが、彰の中で大きくなりすぎた違和感は、自分と仁のDNA鑑定をしないではいられないところまでいつてしまった。というのも彰には仁の顔があまり自分に似ていないような気がしたから。一方で自分と仁との間に血の繋がりがあのような気がしないでもなかった。確信がなかったのである。初めのうちは里奈は断固として否定し拒否してもいたが、最後には諦めたように承諾した。

それから数ヶ月の時間を経て、インターネットで注文したDNA鑑定のキットが届いた。長めの綿棒でほつぺたの裏をちよつと擦って、その綿棒を海外の研究所に郵送するだけという簡単なものだ。1カ月ほどで鑑定結果が郵送されてくるという。彰は、もし結果がああだったら、こうだったらなどということ思い巡らせてはみたが何の気休めにもならなかった。「私も本当にわからないの」という里奈の言葉を信じてみようともあったが、そんなわけがないだろうとも思った。とにかくその間は味のなくなったガムを噛んでいるような、何の意味も持たない時間であった。

それから数週間した頃に紙が送られてきた。届いたのはその辺の誰かがパソコンで5分で作ってプリントしたような、A4の用紙に表のようなものが書かれた鑑定書とやらであった。至って簡単なものだったが、そこに書かれた「生物学的父子関係…0%」の文字だけが妙に悪意を持っているかのように（そんなわけはないのだが）、字が大きくなっていた。こんな紙切れ一枚で人の一生が左右されてしまうのもいかなものかとは思ったが、残酷なほどあつげなく彰と仁に父子関係がないことが明らかになったのである。

男としての尊厳を全否定されたような感覚と、後悔のようなやり場のない感情に押しつぶされそうになりながら彰はそれから3年ほど悩みに悩んだ。何度となく一人で涙を流しとにかく悩み尽くした。里奈に対する嫉妬というのは一瞬湧き出てこなかった訳でもないが、それよりもこの先背負っていく負の感情の重さを考えた時の絶望の方が強かった。一通り精神的な苦悩を味わった後、彰は自分の人生の再建に取り組むことに決めた。里奈との対面では話にならないのは分かきっていたため、早々に弁護士に相談することにした。

職場の先輩の友人だという沼田弁護士を紹介してもらった彰は、法律事務所に足を運ん

だ。

「よくわかりました。彰さんのケースは決して珍しいことではありません」男性側の離婚の代理人を専門とする沼田弁護士は言った。

「そうなんですか。この場合どうなってしまうのでしょうか」

「まずは、ここに至るまでに散々苦しんだ彰さんに幸せになっていただくのが一番重要です。そのために私がお役に立てれば光栄です」

「まず仁さんの親権ですが、特別なご希望がなければ放棄するのが得策です」沼田弁護士は言った。

「最愛の息子が子供じゃなくなるというのは正直複雑な思いです」彰は言ったが、沼田には確信があるようだった。

「もちろん彰さんにとって仁さんは愛する息子さんのままです。ただ、それは人と人というこれまで以上に本質的な付き合いとなります」

「まず離婚によって、彰さんには法的に里奈さんと仁さんの扶養義務がなくなります。まずは生物学的な父子関係にないことから親子関係不存在の訴えを起こします。これを結婚を継続できない十分な理由として、並行して離婚の訴えを起こすことで対応していくのが

よろしいかと思えます」

「里奈に仁を養う力があるように思えませんが」

「相手方の親御さんは」

「健在です」

「年齢や経済力は」

「問題ないかと」

「仁さんは相手方の親御さんの養子に入るのが理想でしょう。相手方に養育能力がないのはもはや彰さんには関係がなくなりますが、誘導できるような意見を準備していきましょう」

「相手方に慰謝料を求めたい気持ちはありますか」

「ありませんが、できれば仁との関係に時間を使いたいです。気持ちの整理がつかないのです。仁は私にとつてずっと血縁のある息子でしたから」

「よくわかります。最初にも言いましたが、珍しいケースではないのです。このようなケースで、その後すべての精神的問題を解決してそれまで以上に幸せな生活を送っていらっしゃるお父さんとお子さんは大勢いらっしゃいます。今はご不安ですが、ご心配いりません」

「先生にお任せします」

「それから仁さんも彰さんと同じ苦しみを抱えているはずですよ。寄り添ってあげていただけると、必ず仁さんだけでなく彰さんの力になりますよ」

「仁さんと彰さんはいわば被害者です。それでもこの苦しみから必ず這い上がれるはずですよ。苦しい日々はもう終わったと私が断言しますので、とにかく前向きに考えてください」

「よろしくお願ひします」 彰は全ての手続きを沼田弁護士に一任した。

翌週には彰は他のアパートを借り、別居を始めた。徐々に本来の自分を取り戻して行く感覚を味わう彰であったが、一方で仁のことも気がかりではあった。不思議なことに、それまで自分の一部のように感じていた仁との距離が急速に遠のいていくのがわかった。それだけでも別居の時間というのは残酷であり、またそれ以上に意義のある期間でもあった。この先、彰は仁と血縁を超えた一人の人間として向き合っていかなければならないのだ。彰と里奈は3回ばかりの調停を経て、正式に離婚した。いくつかの要求の食い違いを驚くほどスムーズに捌いていく沼田弁護士を前に、彰はまるで親の手に引かれるままに歩く子供のようであった。もっとも里奈は最後までDNA鑑定の結果を認めなかったようだが。

来軒に彰と仁がいるのは、それから3年後というわけだ。この3年間、二人は月一回くらいの頻度で会い、お互いの心を埋めるような作業をしてきたのだ。これは13年間も親子の絆を育んできた二人にとって互いに必要な時間であった。

「俺が親父の本当の子供じゃないって言われてから3年くらいたったかな」仁が言った。「そのくらい経つか。俺は結果が分かった時、相当なショックで頭が真っ白だった。その結果を受け入れるまでに3年はかかったよ。お前に話したのが中3の時だったよな。多感な時期だったからお前に話すか、俺も母さんも悩みに悩んだし、一生話さないで置くといい選択肢も実は俺にはあった」

「俺の方は正直今でもキツイよ。父親が誰かわからないなんてさ。そんなやつ周りに一人もないんだから。今さらだけど、結婚を続けることはできなかったの？」

「難しかっただろうな。ほら家の中めっちゃくちゃだった。夫婦喧嘩ばかりでさ」

「確かに」

「それより、お前の母さんがDNA鑑定の結果を受け入れなかったのが俺にとっては辛かつ

た。信じ通せば真実になるとでも思っていたみたいだった」

「母さんも絶対自分の意見、曲げない人だもんね」

「俺は事実を受け入れて前に進むべきだと思っただけ、その方が3人にとって良いと思っただけなんだ。だからお前に話した後、もう一度別の鑑定会社で鑑定した。それでも母さんは受け入れようとしなかったよな。それで降は話は平行線だった。そこに折り合いを付けるのは難しいよ、それぞれの考えだからさ」

「俺は本当の父親が誰か分からないって宙に浮いちゃった感じ。と言ってもどうすることもできないんだけどさ」

「血が繋がっていないことがわかったけど、お前との思い出は山ほどあった。俺は親としてお前に何度も救われた。その思い出は色々あってもまったく消えなかった」

「俺には親父と母さんのいる家族が全てだったからね」

「血が繋がっていないと分かっても、家族の思い出はたくさん残ってる」

「俺も親父が優しくかった記憶しかない」

「いずれにしても、今もこうして話をしている。こんなのも珍しいよな」

「親父、友達少なそうだもんね」

「ま、それはそうかもな」

「一つ二つの短い会話を交わした後、彰は「そろそろ行くか」とに立ち上がった。

「今日は俺が出すよ。昨日バイト代入ったんだ」と仁が言った。
「バイト続けているのか。それはいいな。支払いはさっき俺が済ませといた。ビールも飲んだし。気持ちだけもらっとくよ」

来軒を出たのは、午後2時を少し過ぎていた。

仁は新宿まで移動しバイトがあるのだという。肩を並べて駅まで数分歩くのも恒例だ。

「ほんと、俺の周りバカばっかし。親父はまともなほう。俺ばあちゃんが死んじゃったらこの先どうやって生きていけるかな」

「ばあちゃんは元気だからまだまだ大丈夫だよ。そういうえば、お前誕生日来月じゃなかったっけ」

「そう。17歳」

「うまいパスタ屋を見つけたんだ。今度行ってみるか」

「マジで？行きたい」

「俺は、こうやって時々お前と過ごす日曜は結構好きなんだ」

「ああそう。ま、俺も楽しいよ。やっぱり親父に聞きたいことかもあるし。大人の男のって話す機会ないからさ。学校の先生はキモいやつしかいないし」

「でもさお前に彼女ができて、日曜は彼女との時間に使おうっていうんなら、こんな時間は無くなってしまっただろうな」

「今のところ平気。俺今バイト人間だから。ちょっとやりたいことがあって金を貯めたいんだ」

「そうか。やりたいことがあるっていいよな。頑張ってるお前を見ると俺も頑張ろうという気持ちになるよ。俺は応援してるよ」

「親父ありがとう。今日は本当に。また」
駅の改札前で彰と仁は別れた。

夏の終わりの爽やかな風が、改札前のコンコースを心地良く吹き抜けていった。

10月下旬の日曜日の昼下がりに、二人はパスタ屋にいた。意外なことに普段はこの二人、ネットや電話でのやりとりはほとんどしない。この対面の時間を生活の節目にするかのよう。

「ここ、色々食ってみたんだけど、一番ペペロンチーノがうまかった」と彰が言った。
「じゃ俺もそれで」

「ペペロンチーノ二つ。それからこのグラスの白ワインと炭酸水。それからバゲットを二皿
しばらくして料理が運ばれてきた。

「仁。誕生日おめでとう」彰が言った。

「ありがとう。そういえば、よく家で俺の誕生日に3人でケーキを食べたよね。親父が買っ
てきてくれてさ。チョコレートの」

「そうだった。スーパーの安いやつな。あれはあれで結構うまいんだ。文化ってのは大し
たもんだよ」

彰はペペロンチーノを平げた後、皿に残った油をバゲットで拭き取り口に入れた。

彰は「周りがパリッとして中はもちっとしてる。このパンはなかなかのもんだ」と言いな
がらそれをワインで流し込んだ。

「キリスト教ではぶどう酒はキリストの血、パンはキリストの肉と言われてさ、俺はク
リスチャンではないが…」と言いながら、彰はさらにもう一口、キリストの肉をその血で
うまそうに流し込んだ。

それを見た仁が「俺も一杯飲んでいいかな」と言ったので、

「教会のミサでは17歳でもキリストの血を飲んで良いということになっているらしい」
と口実を付けた彰はグラスの白ワインをもう一つ頼み、二人は改めてワインで乾杯した。

「そういえばさ、俺の学校にドラッグに手を染めてる奴がいるんだ」

「十七歳でか。まさかお前は手を出してないよな」

「うまくかわしてるんだけど、俺もしきりに誘われる。ほら俺の学校あまり柄がよくない
でしょ」と仁が言った。

「ま、俺も酒は未成年で飲んだものだが、意識に作用させるクスリってのは病気のやつ
のためのものと俺は思う」と彰が言った。

「みんな普通の高校生だよ」

「何かに不満なんじゃないか。それをクスリで誤魔化してるんじゃないのか」

「いや、俺も不満だらけだよ。俺、母ちゃんの子供だからさ、時々ろくな人間にならない
んじゃないかな。とか思うことがある」

「そんなことはない。お前の母さんは素晴らしい女性だ（彰のなかでいささか疑問符はつ
いたが、少なくとも目の前の少年に断言すべき理由はあった）」

「それ本気で言ってる？ちょっと聞いた話だと、最近母ちゃんは男の人と暮らしてるよか」
仁は笑った。

「お前が小学校で友達にいじめられた時、母さん校長室に怒鳴り込んでいったら。『知らねえふりしてんじゃねーよ』ってさ。お前の母さんは自由の申し子だ。四分の一はアメリカ人の血が入ってるからかもな。とにかく誰にも邪魔できない自分の世界観を持つてる」
「アメリカ人の血か…」仁が呟いた。

「お前も何かに打ち込めるといいんだけどな。お前はかなりまともなほうだし、小さな時からしっかりしてるよ。半分本気で母さん以上にしっかりしてる。お前の本当の父さんがしっかりしてる人なんじゃないかな。それは冗談だけど、そういえば…」言いかけると彰はかばんから本を取り出した。

「この本知ってるか。孫子って言うんだけどお前に渡そうと思って」

「何それ」

「戦い方が書いてあるんだ。人生のな。中国の古典だよ」

仁は受け取った本をパラパラとめくった。

「風林火山って孫子なんだ。武田信玄の」

「元々はな。お前歴史好きだから、結構ハマると思うよ」

ワインを飲み干した後、甘いものでも食うかと、彰はジェラートを2つ注文した。

「そういうえば、結婚する前に、お前の母さんとボロい車で夜の海に行ったんだよ」彰が言った。

「どこの海？」

「確か江ノ島のほうだった」

「車で砂浜まで入れるようになって浜辺に入って行ったら、車のタイヤが砂にハマっちゃってさ。そういう時に出ようとアクセルを踏めば踏むほどタイヤが空回りしちゃうって砂に埋まっていつちゃうんだよ」

「へえ」

「ついに車のボディがべったり砂浜に着くところまで埋まってどうしようもなくなっちゃった。途方にくれてるうちに、夜が明けちゃったんだ」

「最悪だね。カッコ悪…」

「そしたら朝の5時ごろかな。向こうから散歩してるおじさんがきたわけ。俺たちが困ってるのを察したのか、向こうにあるあの石を持ってこいと俺に言うんだよ」

「へえ」

「俺が言う通りにするとタイヤの下の砂を掘って、そこに石を噛ませて、何かうまくことやって車を出してくれた。俺は本当に助かってお礼を言ったんだけど『礼はいらない。君も困った人がいたら助けてやれよ』と言い残して去っていった。今も覚えてる、なかなか渋いおじさんだった」

「そのおじさんの言った通りに、親父も誰か助けた？」

「残念ながらそういうチャンスってないんだよ。まず困ってる人に出会わないし、仮に会っても助けてやれる力がなかったりする」

運ばれてきたジェラートがなかなかのクオリティだったため、二人はかきこむように流し込んだ。氷の粒が溶けるか溶けないかしないうちに、仁が突然かしまったように彰を見た。

「親父。俺さ…」と言いかけた仁の顔が一瞬曇ったのが彰には分かった。

「どうした。何かあったか」

「俺、ずっとアメリカに行きたくて、バイト頑張って金貯めてたんだ。俺やっぱり俺西海岸の音楽が好きなんだよな。金貯めてアメリカ行って、西海岸で音楽やりたいと思ってて

さ」

「カリフォルニアか…」彰がつぶやいた。

「NOFX の LONGEST LINE って歌の『俺はいつも一番長い列の一番後ろにいる』って歌詞とか俺の気持ちそのものなんだよ。俺はいつか西海岸で音楽にとっぷり漬かりたい」

「音楽で食っていくつもりか」

「俺、親父にギター教えてもらってから、ギターが友達みたいになってたじゃん。西海岸の音楽聞いているうちに、俺は一番最後でいいやつて思ったんだよね。周りの奴はみんな幸せそうだけど、俺は最後に幸せになるからいいやつて。俺の居場所がきつとあると思う。だから俺はアメリカに行きたいって話をばあちゃんにしたんだ」

「そしたらさ、ばあちゃんハーフじゃん、人生の最期はアメリカで迎えたいとかで、マリブの家に帰ろうと思ってるっていうんだよ。仁もついて来るかと」

「それでどうしたんだ」

「突然すぎてさ、答えられなかった。親父どう思う」

「お前には神様が付いているよ。普通はそんなチャンス巡ってこない。行きたいと思ってるところに住めるなんてさ」と、言いながらも彰は仁ともう会うことができなくなるような

気がした。いや、もうこの少年はこんなに居心地の悪い国に戻ってくることはない。彰はそう直感的に理解した。

「俺がアメリカに行っちゃっても、親父は寂しくない？」

「そりゃ寂しいさ。でも」

「でも？」

「お前は昔から輝いてるよ。何をしてる時も。仁は俺の誇りだよ。こんなカッコいい息子を持たれたことを俺は神様に感謝してる。頑張ってこいよ」

なぜだか上を向いた仁と同じように、彰も涙がこぼれないように上を向かざるをえなかった。

仁の目から一雫の涙がこぼれた。

「ありがとう。俺頑張るよ」仁は言った。

アメリカでは子供の2人に1人は親の離婚を経験しているという。仁はきつと日本にいるよりずっと自由に羽を伸ばして、大きくはばたいていけよう。それが彰には少し寂しくもあり頼もしくも感じた。

その後どんな会話をしたか彰は憶えていない。

ただ、この少年には素晴らしい未来しかないと確信した。この少年には間違いなく神様がついている。少年の純粹な心にしか宿らない最強の神様が。

パスタ屋を出た二人の後ろから、心地よい冷たさの混じる風が勢いよく吹き抜けていった。

